

総会に出席して―「名教自然」の石碑に思う

藤林 徹（昭和 37 年電化卒）

7 月 25 日の「国大化学会総会」の懇親会で、工学研究院長の石原修先生のご挨拶を拝聴し、感銘を受けました。

これまで、国立大学が文部科学省の方針から経営に苦しんで、産業界のような成果主義の増埒に巻き込まれていて、横浜国大も例外ではないと伺ってまいりました。そのことは大学の運営にはとても大切ではありますが、何か精神的なものが薄れていかないか心配でありました。そのような懸念のなかで、石原先生が「名教自然」の石碑に注目されているとお話を伺い、先生のお考えを大変心強く感じました。

私は昭和 33 年から 37 年の 4 年間、弘明寺の工学部に通っていました。校門を入るとすぐにこの遠州鈴木先生の石碑と対面し、その日の国大生活が始まりました。私は鈴木先生の世代からずっと離れていて、特にこの石碑の由来などの説明を受けた覚えはありませんが、名教自然と三無主義は他の大学にはない哲学として、このような環境で学んだことが卒業後の社会での私の自慢でありまたポリシーになりました。また、三無主義という方針のもとに、大



変自由に学び、またよき先生と友人にも恵まれたことは私の一生の宝になりました。

その後、工学部は弘明寺から常盤台に移りましたが、あるとき常盤台キャンパスを訪れたとき、ふと「名教自然」の石碑に会いたくて、探しました。しかしながら、再会した石碑は弘明寺当時の面影はなく、ひっそりと佇んでいる姿に見え、なんだか寂しさを感じながらその場を去りました。「名教自然」が横浜国大の教育のシンボリックな理念として、全卒業生の心の故郷となり、いつか「名教自然」の石碑が横浜国大のランドマークとなればと願っています。